

今年の日中国交正常化40周年となる一方、日台断交から40年となる。それに合わせ台北駐日経済文化代表処の馮寄台代表が毎日新聞に寄稿した。

◇ 1972年、日本は中国大陸の「中華人民共和国」を承認し、台湾の「中華民国」と断交した。我々の在日大使館は閉鎖され、その後まもなく、私の父は東京に設立した台湾の「代表処」に派遣された。外交官だった父は「外交関係と外交官資格を失って、台日間のあらゆる関係やパイプは、また一から交渉し、構築していかなければならな

馮寄台・台北駐日経済文化代表処代表

馬政権以降 深まる「台日」



や航空会社も台湾との取引を避けたほどだ。これらの状況はつい最近までほとんど改善されていなかった。

過去4年間、台日間で「投資保障協定」「航空自由化協定」「ワーキングホリデー協定」などが相次いで締結された。毎年20万人を超える北海道の政策により兩岸関係が和緩し、台湾は国際社会のみならず日本との関係も徐々に、そして確実に改善してきた。馬總統の対中、対日政策はゼロサム関係ではなく、台・日・中、のいずれにも利益をもたらすものである。

い」と語った。父の落ち込んだ表情は今でも覚えている。

だが、4年前から馬英九總統の「統一せず、独立せず、武力行使せず」の政策により兩岸関係が分処を開設した。また「日本の華」といわれる宝塚歌劇団の台湾公演(13年4月)や、日本での台湾故宮博物院の文物展示(14年に予定)も、ようやく実現することになった。

過去40年間を振り返ると、兩岸(台湾・中国)は世界各地で激烈な対立を繰り返し、日本でも例外ではなかった。一部の在日華僑界、日本の政界、学界、経済界、さらにはマスコミまでもが台湾を敬遠した。一部のホテル

を重視している。昨年3月の東日本大震災では、馬總統夫妻は積極的にチャリティー活動に参加し、台湾の全民衆に「日本へ支援の手を差し伸べよう」と呼びかけた。馬總統が08年に就任して以来、總統府で会見する外国人訪問客は4年連続で日本人が最多である。最近も、現在の台日間は過去40年で最高の友好関係にあると表明した。

「日本との関係がどんなで最も困難な時にお前の父さんは日本に派遣された。そして台日関係が最も順調なときに息子が日本で勤務していることに、天國の父さんはさぞかし万感の思いを抱くことでしょうね」と感慨深く語った。

日台断交40年は記念すべきことではないが、台日間に歴史的・地理的・文化的な特別な関係は脈々と引き継がれている。双方は共有する自由と民主主義の普遍的価値に基づいて、将来もこの特別な友好関係を強化するよう互いに努力すべきである。

馬總統は常に対日関係

を重視している。昨年3

年初、私は台湾に戻って90歳になる母親と共に旧正月を過ごした。母は